

アダモ + ファイデン

セバスチャン・アダモ + マルセロ・ファイデン—— 大都市の奥底で進むリアリズムの実践

控え目な急進性: アルゼンチンの若手建築家たち

カミッロ・マーニ

参照 | 本誌 pp.3-45

セバスチャン・アダモとマルセロ・ファイデンは大学時代からの友人だ。1977年生まれの彼らは、2002年にブエノスアイレス大学の建築・デザイン・都市計画学部(FADU)を卒業した後、両者ともバルセロナで勉学を続けた。マドリードに暮らし、21世紀初頭のスペインに特有の文化的空気を存分に吸収した。当時は経済危機がまるで他所の出来事のように感じられ、新しい才能を発掘しようと世界の建築批評がスペインをつぶさに見ていた。2004年に2人はアルゼンチンに戻り、建築設計事務所を開くことを選ぶ。この選択から読み取れるのは、独自の道を開拓するという強い意志である。カルロス・メネム大統領(在職:1989-99)時代からの危機に苦しむ祖国に戻るのは勇気のいることだが、同時に、おそらくヨーロッパでは若い世代の建築家に開かれなかった建築設計(それだけにとどまらない)のチャンスに溢れていた。

帰国から14年が経ち、その間に23を越える建物を実現したアダモ+ファイデンは、ラテンアメリカ文化の最も興味深い代弁者に数えられるまでになった。ブエノスアイレスに暮らし仕事をしている。そこは彼らのプロジェクトのほとんどが実現された都市だ。もし筆者が彼らと直接知り合うことがなかったら、これほど若い建築家とは思ひもしなかっただろう。彼らの作品には、イデオロギーという上部構造や激しい競争心から自由になった人ならではの落ち着きと自制が感じとれる。アダモ+ファイデンのプロジェクトは穏やかで、大都市ブエノスアイレスの喧騒に浸されながら、来訪者に晴朗な異質さを見せると同時にこの地のあらゆる都市的性質をまとっている。アダモ+ファイデンは飾り気なく語り、自分たちの建物をありのままに描写し、空間構成、経済、建設技術に関わる諸問題とそれへの解答を説明する。複雑な議論はせず、図式的に書き換えるのではなく、昔の建築家といった風情であたかも自然のプロセスのように建築を説明する。一見して、すべて単純で、一貫性があり、合理的に思える。しかしながらそうした態度の裏に、設計思想の強烈な過激さが隠れており、

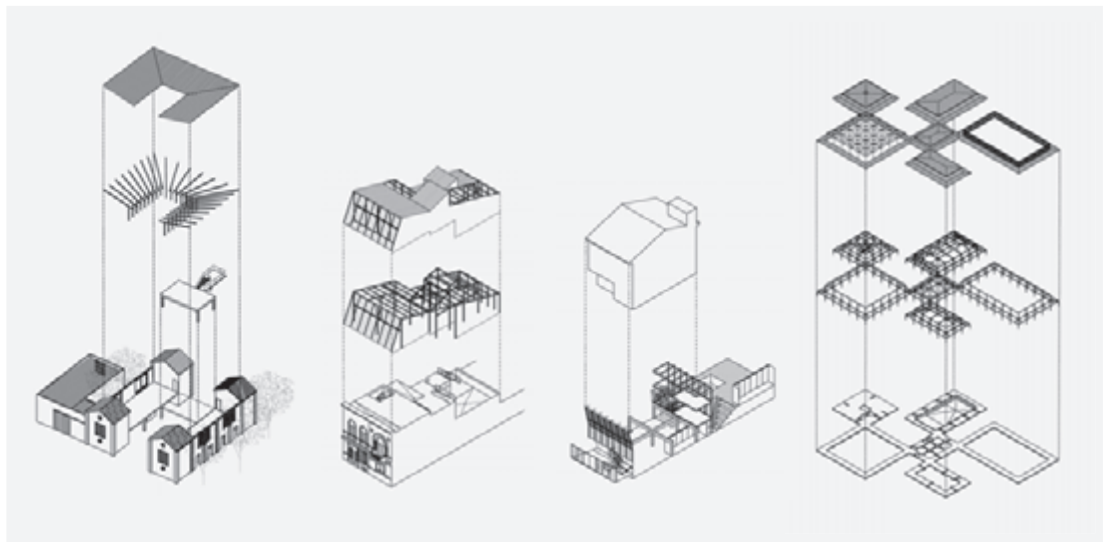
ある種の確信が彼らの作品のあらゆる細部に目立たないかたちで現れる。この設計への確信にこそ、彼らの建築のクオリティが見出せる。それは非常に明快であるがゆえに、アイコンの表現では示せない。アダモ+ファイデンが使う表現言語は、明確で分かりやすく、簡潔で無駄のない少数の身振りの反復からできている。現代建築を巡る議論に加わるためにアルゼンチンの伝統から距離を置いている証拠に、おもな国際建築展等に幾度となく参加している(シカゴ・ビエンナーレ、ヴェネツィア・ビエンナーレ、ニューヨークのグッゲンハイムやストアフロントでの展示)。

『CASABELLA』読者にアダモ+ファイデン作品の全体像を見せるために、われわれは彼らのプロジェクトを説明することのできる3つのタイポロジーのテーマを選んだ。「建築物の上に建てる」は、既存建築の再生や増築から生まれた建物を含む。「都市の接ぎ木」には、南米特有のマンサナ(都市ブロック)にある敷地の多世帯用建築に関するタイポロジー的探究が集められた。「風景のオブジェ」は、建物を含めそのフォルムを決定する風景の構成要素が特徴的な作品群を指す。これら3つのグループ分けによって、テーマが似通った作品を関連付けられ、その一方で、建築的ヴォキャブラリーを特徴づける横断的側面を説明することができる。その目的に照らして、彼らの作品に意味と独創性を与えるいくつかの論点に絞って考察することが肝要となる。

第1点は建築の家庭的性質に関わるものだ。おそら

くおもに住宅建築のテーマに応答しなければならない条件下で、アダモ+ファイデンは時間をかけてある風変わりな二元論を磨いてきた。それは建物のミニマリスト的冷たさと、屋内空間の温かなもてなしを対置させる二元論である。2人の建築家はこの2側面を操作して、一方に偏ることのない洗練されたバランスを追求する。床スラブ、打ち放しコンクリート造の窓枠、グレーチング・パネル、白く塗装した無表情なスチール構造、ファサードの厳格な幾何学といった諸要素が、草木の生い茂る空中庭園、十分な自然採光、広いガラス壁、ファミリー・グリル(有名なアルゼンチンのバーベキュー)に使えるテラスと共存している。その成果は明らかな矛盾であり、快適さを表すあらゆる伝統的で類型的なかたちを覆し、調和を感じ取れる屋内空間によって住宅にクオリティを与え住人の複雑な親密さを見出せるような要素をより深く考察することを優先する。

第2の点は建築へのこだわりである。アダモ+ファイデンにとって、あらゆる機会が建築的議論を深めるチャンスである。より小さくより目立たない(規模の点で)プロジェクトでも、すべてのディテールを価値付けて限界を挑戦に変えることで、設計プロセスを徹底的に解剖する強い意志が認められる。これが特に顕著なのが初期作品である。よくあることだが、いずれも小規模な計画だ。最も象徴的な事例がスニェス邸(本誌p.12)で、そこでは単なる天幕^{テント}が住宅の新たな輪郭を描く手段になっている。シャルー邸でもクラブハウス「ラ・カンディダ」でも同様に、単なるスタッ



ダイアグラム: マッキ邸、ブラス邸、フェルナンデス邸、クラブ・プエルトス

無断で本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2018 Arnoldo Mondadori Editore
©2018 Architects Studio Japan

3——ヌニェス邸、ブエノスアイレス

参照: 本誌 pp.12、35、42

極小の計画である。既存のテラスの上に増築した小さなヴォリュームと、直射日光から保護する大きな天幕^{テント}が本プロジェクトの特徴だ。このケースでは建築は少数の要素からなり、屋根の幾何学形態と住宅の家庭的精神に新たな定義を与えた。

設計: セバスチャン・アダモ、マルセロ・ファイデン

協働者: Giuliana Nieva, Iván Fierro, Julien Hosansky,

Marie Taillafer de Laportalieri, Carolina Molinari

構造: Carlos Margueirat | 建築主: Alejandra Núñez | スケジュール: 設計・施工 2009年

所在地: Superí 2208, Ciudad Autónoma de Buenos Aires, Buenos Aires, Argentine



立面図



テラス



建物上部を見る

4——フェルナンデス邸、ブエノスアイレス

参照: 本誌 pp.13-14、35、43

既存の1世帯用住宅は完全に着替えさせられ、プールに面して温室を挿入することによって外観も空間性も変更された。ここでは既存建築は来訪者の視界から消え、金属のパネルと構造による白色の新たな幾何学形態に統合された。

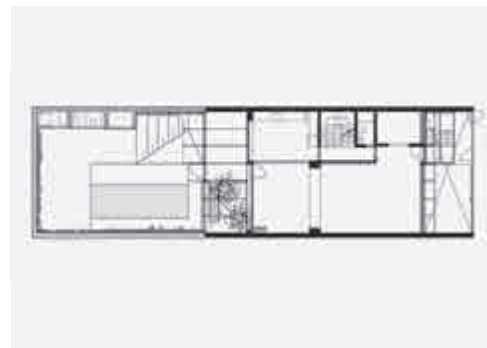
設計: セバスチャン・アダモ、マルセロ・ファイデン

協働者: Jaime Butler, Gonzalo Yerba e Paula Araujo Varas

建築主: Romina Fernández

施工: 設計・施工 2014-15年

所在地: Aguilar 2159, Belgrano, Ciudad Autónoma de Buenos Aires, Argentine



2階平面図



パティオ



街路より見る

【都市の接ぎ木】

1——アリベニョス3182ビル、ブエノスアイレス

参照:本誌pp.15-16、36、44

このプロジェクトは敷地の奥行きを活用して、二重構造の建物内に6つのデュープレックスと2つのシンプレックスを嵌め込んでいる。断面図を見るとヴォリューム群の嵌めこみがよく分かる。平面図で目立つのは内側のパティオに面して配された水廻りの層で、これによって他の居住空間に最大のプライバシーを保証している。

設計:セバスチャン・アダモ、マルセロ・ファイデン | 協働者:Carolina Leveroni, Luciano Intile

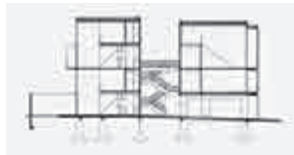
構造:AHF S.A. Alberto Fainstein | 施工:Adamo-Faiden(不動産開発)

建築主:Fideicomiso Arribeños 3182 | スケジュール:設計・施工 2007年

所在地:Arribeños 3182, Ciudad Autónoma de Buenos Aires, Buenos Aires, Argentine



2階平面図



断面図



デュープレックス内部



街路側ファサード

2——オリエンターレス通り138番地の33ビル、ブエノスアイレス

参照:本誌pp.17-19、36、44

この5階建ての建物は6戸のシンプレックスと2戸のテラス付きトリプレックスを結合した結果である。センターコアには水廻りの機能が集められ、外側のファサードに大開口部が設けられた。外壁は金属メッシュと大型フレームからなる二重スキンと、幾何学的で厳格なファサードに特徴づけられている。

設計:セバスチャン・アダモ、マルセロ・ファイデン | 協働者:Ainoha Mugetti, Pablo Garcete, Gonzalo Yerba

構造:AHF S.A. Alberto Fainstein | 施工:Adamo-Faiden(不動産開発)

建築主:Fideicomiso 33 Orientales 138 | スケジュール:設計・施工 2012年

所在地:Treinta y Tres Orientales 138, Ciudad Autónoma de Buenos Aires, Buenos Aires, Argentine



5階平面図



テラス



街路側ファサード



ルーフテラス

信仰その他のために

「モンテ礼拝堂」設計=アルヴァロ・シザ

素朴と記念碑性の間:アルガルヴェの礼拝堂
エリザ・ベゴリン

参照 | 本誌 pp.48-61

アルヴァロ・シザが設計したモンテ礼拝堂は、彼のアルガルヴェ地方初の作品であり、モンテ・ダ・シャルネカに位置する。そこはラゴスに近いアルガルヴェ地方の農村、バラン・デ・サンジョアンから少し離れた土地だ。カトリック信仰の小空間——信仰、祈祷、瞑想に捧げられる——のための設計プログラムは、数ヘクタールの土地を所有するクライアント、スイス人とアメリカ人の夫婦の意志から生まれ、

農村ツーリズムのより大規模な計画に組み込まれた。その(将来的)目的は、この土地を共同体に益する精神的集合の場に変えることだ。短期間——約9ヶ月の工事——で建設されたシザの本作は、外見に明らかな建築的単純性を越え出て、彼のポエティクスもしくは彼の建築の「作り方」に独自の諸特質を巡るより広い考察を切り拓いた。このプロジェクトから溢れ出す考察は3つの主要なテーマにまとめられよう。場との関係、光の支配、伝統との連続性である。

風景への挿入に着目すると、礼拝堂は所有地で最も高い地点に置かれている。そこには小さな農作業小屋があったが、シザは新しい建築にとっての定点とすることを決めた。1本の歩道を登っていくアクセスは、一種の短

い「巡礼」であり、周囲を囲むアルガルヴェ地方特有の緑の風景と特異な関係を樹立する。一種の「精神的アクロポリス」の創出という身振りは、すでに初期のスケッチにはっきりと現れていた。そこには(多様なスケールの異なるプロジェクトにおいて)場に位置を占め、風景との関係から建物を配置してその意味を解釈するという、ポルトガル人建築家シザの特異な能力が凝縮されている。これこそが彼の設計方法に内在する能力である。彼の方法は——地形のより一般的で推定可能な解釈を越えて——普遍的な法則を持たない。しかし必要とあれば、才能に富んだ主観的感性がシザ作品には通底している。古代人は、一部は錬金術的で一部は数学的な素質と見なされたこの^{アル・テ}技芸を、「ジェオマンツィア(土占い)」——ギリシア語



南東からの俯瞰



北西より見る



南西(入口側)より見る

機能できるまでに至ったことと、ニューポート・イスラム協会の掲げるビジョンが完全に実現するまでに(今後もさらに)かかる時間とはまったく別の話である。

マーカットは、住宅作品によって国際的に確固たる評価を築く一方で、AIC 以前にも大きな規模の作品を2つ手がけている。それらについても触れておかねばならないだろう。1つめは、ショールヘヴン川沿いのアーサー&イヴォンス・ボイド・アート・センターだ。シドニーの南、ニュー・サウス・ウェールズ州沿岸部に位置し、マーカットにとっては地元シドニーでの仕事の気楽な延長とも言える作品である。レッグ・ラーク、ウエンディ・ルーウィンとの共同設計で、1999年に竣工し、自然と文明(敷地と芝生)の狭間にあるランドスケープの中に建つ実用的な施設棟の性質を保持しながらも、眺望を楽しむ機械としての役割も果たしている。

2つめは、数年内には竣工が予定されているもの、ニューポートのAIC 同様、数年がかりのプロジェクトである。ライトニングリッジ——同じくニュー・サウス・ウェールズ州だが、こちらはアウトバックに位置する——で建設されているオーストラリア・オパール・センターは、間違いなく、マーカットにとって最も大胆なスケールのプロジェクト(ウエンディ・ルーウィンとの共同設計)だ。両プロジェクトとも大規模な複合施設だが、どちらも、形態における関係性と効果は、

建物とランドスケープとの関係性——つまり、マーカットの評価と名声において特別な意義をもつ関係性——に大きく依存している。

マーカットの作品が成功を収めた一因は、彼が作品に込めた野心や理念に理解を示すクライアントとの連帯にある。だが、マーカットのクライアントは、そこから一歩さらに進んで、自身が彼のスタイルに共鳴していることを受け入れ、そのスタイルに従って生活しているのだ。2016年に『ガーディアン』紙に掲載されたインタビューで、マーカットは、郊外送りには「死んでも」なりたくないと言い放っている。だがAICは、どこからどう見ても郊外の建築物そのものだ。郊外生活につきものの妥協に満ちているし、マーカットを尻込みさせた西部郊外へのスプロール化による開発の産物でもある。隣接しているのは、アルトナ・ミニ・レイルウェイ[南側。実際に敷地内でミニトレインを走行させてもいるホビークラブ]と、ベイサイド・カレッジ・ベイズリー・キャンパス[北側]だ。また、AICにはまっさらなままのガラス壁がない。あちこちにポスターが貼られ、必要に応じてコミュニティの案内通知も掲出されているのだ。それに、マーカットの作品なら当たり前のように備えられているデザイナーズものの家具も見当たらないだろう。資金はもつばら、敷物や作り付けの備品、建具に費やされているのだ。

そうした意味では、AICは、詩的な居住空間だと識別



礼拝ホールを見下ろす

されているからではなく、職人技と確たる意志に基づく自己改革、そして日常生活におけるニーズとが無骨に出合った結果であるからこそ、AICは、とことん、オーストラリアの建築物なのである。

作品:オーストラリアン・イスラミック・センター

設計:グレン・マーカット | 共同設計者:Hakan Elevli

施工:Mohammed Haddara / Haddara Constructions

建築主:Newport Islamic Centre / Newport Islamic Society

スケジュール:設計・施工 2016-17年

所在地:23/31 Blenheim Rd, Newport, Victoria 3015,

Melbourne, Australia



マトロネウム(2階回廊)



礼拝ホール

「教皇庁パヴィリオンのための礼拝堂」
2018年ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展
設計＝ノーマン・フォスター

テンセグリティ＝オヘル・モエド：
ノーマン・フォスターとバックミンスター・フラー
フランチェスコ・ダルコ

参照 | 本誌pp.86-115

アルヴァロ・シザがアルガルヴェに建てた礼拝堂とも、グレン・マーカットが数ヶ月前にメルボルンに完成させたモスクとも異なり、これら2作品とともに本特集で紹介しているノーマン・フォスターの小さな建物は礼拝に使われるわけではない。献堂されていないとはいえ、これは「礼拝堂」であり、礼拝堂として設計された。この違いとそこに含まれる矛盾は説明するだけの価値がある。それには、フォスターがこの仕事に取り組んだ動機と目的は何だった

のかをまとめておく必要があろう。彼が設計した礼拝堂は、第16回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展におけるローマ教皇庁パヴィリオンとして、ヴェネツィアのサン・ジョルジョ・マッジョーレ島に建設された10の礼拝堂のひとつである。このプロジェクトは性格の異なるいくつかのモデルと理論的枠組みから出発した。それらが選ばれたのは、建てるべき建物群が出会いと歓待の場の表現として構想されたものだと示すためである。この目的に焦点を絞



アプローチより見る



祭壇へと続く通路(小身廊)



外部に開かれた祭壇



左下に礼拝堂、右上にサン・ジョルジョ・マッジョーレ聖堂を見る



配置図/平面図



アイソメトリック図